

文芸

俳句

短日の本屋で開く直木賞

池田 逸子

裸婦像と小春分け合ふベンチかな

伊藤 敬子

耐え難し我が身背きし絵踏かな

今関満喜子

水仙や部屋いっぱいの香りあり

魚地 照子

瀧凍てて全山つつむ無音界

江森 悦子

畑にいて日の伸びし事ふと思ふ

川島 通則

初雪や目鼻欠けたる道祖神

向後 寛

霜解けて野菜畑の萎え萎えに

越川せつ子

霜解に猫の足形廊下にも

越川 義則

おれの靴寒さ噛しめ走りけり

小松 藤男

ひととせの阿吽を秘めて落葉かな

佐瀬 輝夫

霜解を待ちて始める畑仕事

椎名万里子

凍ゆるむ老に良き事近づきぬ

鈴木とし子

ひそひそと大地の会話凍ゆるむ

鈴木 利子

復興の槌音にぶり冴返る

玉虫 栗扇

晴れわたる真白き田面霜解ける

土屋美枝子

子の話すひと日のことや冬の風呂

土屋 義昭

ニン月やカシオペア座の切手綺羅

戸村 静華

雪解し久々に子と語り合う

西崎さち子

賀状読む君との距離を狭めつつ

藤田 雅夫

短歌

冷たさはゆきつもどりつやぶ椿

ひとつ開きて春の色なす

高梨 キヨ

横たわる息なき父に娘が話し

正月ですよと膳に餅添え

内藤 くに

気兼ねなき夫婦二人のドライブは

道に迷うも楽しき思い出

伊藤 定男

.....

御主人の集めたものらし骨重が

友の家なる部屋に賑はふ

鈴木 まさ子

静かなる物言ひをせし息子なり

目を閉じ聞けば亡き夫に似る

田崎 尚美

飛び来しと見しも二羽なる頬白は

さへづるもなく庭を去りたり

青木 秀子

ブランコを公孫樹めざしてこぎゆけば

枝は新芽を多につけあつ

西山 満里子

たわいなき会話に花咲きつつがなく

郷のをみな歩射の儀終る

押尾 輝子

訪ひ行けば八十路の叔母は紫の

手作りポーチを吾にとくるる

芹川 初子

夏みかんのたわに生りて冬晴れの

空の下にて黄の色の濃し

平山 芳子

抱きやるポメラニアンの子犬の瞳

絵本で見しよにくるくる丸し

八角 三枝

夕映えに浮かぶは遠く二百キロ

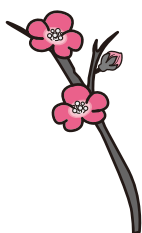
富士山を見ぬ銚子の丘ゆ

島田 ますみ

二センチにも満たざる鮭の稚魚の群れ

栗山川に放流されたり

斉藤 つね子



こうほう博物館 60

殿塚・姫塚

町の北西部の芝山町との境近くに、大きな古墳が二基並んで鎮座している。どちらも前方後円墳という真上から見るとかぎ穴のような形をしている。大きい方は、長さ八十八メートル、高さ八・八メートルあり、小さい方でも、長さ五十八メートル、高さ四・八メートルある。仲良く並んでいるように見えるところから、いつの頃からか「殿塚・姫塚」と呼ばれたのであろうが、決してお殿様とお姫様が埋葬されているわけではない。

この二基の古墳は、昭和三十一年に発掘調査され、たくさん人の「人物はにわ」や馬型の「動物はにわ」が出土した。このことから、これらの古墳が貴重である、国指定文化財になったまではよかったが、その時の指定名が「芝山古墳群」と付けられた。しかし、町では中台地区にあることから「中台古墳群」と呼び、また、学術的にもそのように呼ばれる。この古墳はこの地域では特に大きく、出土したたくさんのはにわから、今から約千五百年前にこの地域を治めていた国造のものではないかと言われる。

早春のこれから桜が咲くころが、古墳を見るにはもっとも適した季節になる。



▶ 早春の殿塚古墳